メタフォリカル・マッピング
——空間から時間へ——

小　林　典　子

「時間」は，人間が生きて空間に存在している，そのことと本質的な係わりをもっている。誰でも自分のいる位置と太陽や月の位置関係や昼夜の繰返しによって，また時計の針の動きによって，時間という事象を知っていると思っているのであるが，にもかかわらず，時間そのものを人間の感覚器官を通して，直接肌に触れたり，目で見たりして，知覚，認知することが難しい抽象性の高い概念である。この時間概念がどのように言語化され，日常の言語活動の中で表現されているのかを考えてみると，それ自身の言葉によることは難しく，より具体的に物理的に知覚しやすい事象に即して受け止められ，言語化されていると考えることができる。これは人間が生きる営みの中で，時間概念を他の事象との関連においてどのように位置づけ理解しているかを示すものである。

まず，時間表現の顕著な特徴の一つは，空間概念の言語表現との関連性である。空間もまた人間の存在そのものに本質的に係わりをもつ概念であるが，人間を取り巻く三次元空間や二次元的場所，さらに人間それ自身を含めて空間に存在する存在物は物理的実在物として知覚，認知されやすい。この経験的基盤によって時間概念が理解される，つまり，空間概念の認知枠をメタファーのはたらきを通して時間概念の一部に写像すること——メタフォリカル・マッピング（Metaphorical Mapping)——によって理解され，言語表現に具現化されていると考えることができるのである。

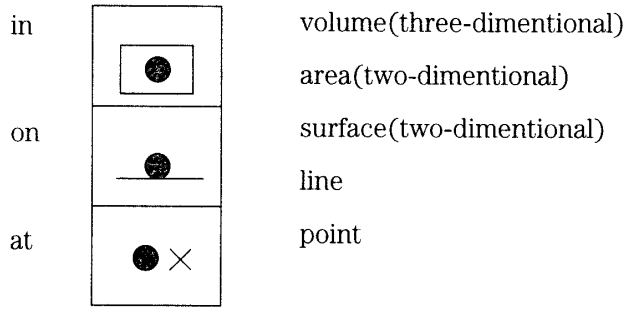
ここで「メタファー」の意味を明確にしておくことが必要である。メタファーという時，まず頭に浮かぶのは言葉の修辞的側面である。ある言葉が本来はそれが適用されない領域の事象に，何らかの類似点が見出され転用されて，個性的な創造的な言語表現を生み出すことのできる，特に詩的表現には不可欠な言葉のはたらきの一つである。この転用が日常的な言語表現の中に定着すると，もはや創造性は失われてしまうが，普遍的に用いられることによって，その言葉の派生的意味となり多義性がもたらされることになる。このようなメタファーは conventional metaphor または dead metaphor ともいわれメタファーとして価値のないもののように思われがちであるが，それどころか言語の本質的で普遍的な面を，さらには人間の思考のもたらす概念のありようを写し出していると考えられるのである。一般的に

抽象的な概念は理解することが難しい。それを理解するためにはより具体的な概念に即して考えてみることである。そしてそこにはたらいている心的過程は他ならぬメタファーであり，メタファーを通しての概念理解はさまざまなレベルにおいて日常の言語表現に具現化されていると考えられるのである。従ってここでは，ある対象となる概念領域（target domain）が，より具体的な概念領域（source domain）の認知枠を写像（mapping）することによって理解され，言語表現と体系的に結び付いている，このことをもってメタファーと解し，根本的には詩的なメタファーも，日常的な言語表現におけるメタファーもレベルの違いこそあれ同質のものであると考えるものである。

空間概念を通して時間概念が理解され，そのことが言語表現として具体的に表れている最も明白な例は，空間を表す space の語そのものが時間の意味に用いられる場合である。例えば，He should arrive in a very short space of time や After a space he continued his story のような文の中ではまさに時空一体の感がある[(1)]。しかし，空間の時間への転用はこのような一語の問題だけではなく，はるかに広い範囲に及んでいるように思われる。本稿ではこの問題を，英語表現における１．前置詞の多義性と，２．「前後」の方向性，の二点に焦点を当てて考察することにしたい。

１．前置詞の多義性

前置詞の中には本来空間における位置(position)を示すものがある。そのような前置詞として in，on，at をあげることができるが，それぞれの占める空間的位置について Quirk, R. et al (1985)[(2)]によってまとめると次のようになる。



上記の前置詞はいずれも多義語であって，本来の空間的位置以外にもさまざまな空間における現象をとらえるために用いられ，また空間領域以外の領域に転用されている。その中に時間的意味への転用が含まれているのであるが，ここではまずこれらの前置詞とそれに支配される prepositional complement との間にみられる(a)空間的意味と(b)時間的意味を対照させながら例文を見ることにしたい。

(１) (a) We keep the money in the box.

(b) I always feel drowsy early in the morning.

(2) (a) There are no more chairs—you'll have to sit on the floor.

(b) A one-day course for beginners will be held on May 14.

(3) (a) He was standing at the bus stop.

(b) There will be another train at 2:30.

それぞれの組の(a)の空間的位置は物理的に認知することはたやすく，(b)はこれが時間へ転用されたものであると思われるのであるが，その間にはどのようなメカニズムがはたらいているのであろうか。この点について個々に検討していくことにする。

1．1　空間領域の in

前置詞 in は本来「三次元空間，または二次元的場所の内部の位置」を示しているということができる。また内部は境界線（面）を境に外部(out)と対立しているはずである。(1)(a)の box の場合は空間が底面と垂直面によって仕切られた，つまり外部と境界面をもって仕切られた典型的な容器の形体をもち，その内部の位置の認知はきわめて容易である。しかし，実際に表現される空間や場所は必ずしもこのような明確な境界がある場合ばかりではない。そこで，in によってその内部の位置が示される場にどのようなものがあるか，さらに例文を見ることにしたい。

(4) I have a pain in my stomach.

(5) There isn't a comfortable chair in the house.

(6) There are many different species of wild cat in Africa and Asia.

(7) Take a seat in the sunshine.

(8) They lost themselves in the fog.

(9) There is no cloud in the sky.

(10) There was surprise in her voice.

例文(4)では他ならぬ人間であるわれわれ自身が境界をもって内側と外側に仕切られた存在物であるという根源的な経験を示している。同じように自分自身の外側の空間にある存在物についても境界の内—外はごく自然に認識され，(5)の house の場合も明らかである。このように内—外の方向性をもつ存在物は，box，stomach，house とさまざまであるが，そこから共通して引き出すことができるのは容器のイメージであり，認知枠として「容器のイメージ・スキーマ」を想定することができる。さらに，容器内部の位置は固定されないという特性を考えることができる。(6)の地域としての Africa，Asia は境界線は設けられているが，容器に必要な境界面は欠けている。さらに(7)(8)(9)の sunshine，fog，sky のような自然現象，(10)の発声による空気の振動のような物理的現象は，その存在を知覚できるとして

も明確な境界を確認できるわけではない。このような漠然とした空間領域に box と同じ in が用いられるのは，それが境界面をもつ容器として見立てられ意味づけされている，つまり「容器のイメージ・スキーマ」を投影してとらえられているからであると考えることができる。そしてこの認知枠が他の領域にも拡張されると考えられるのであるが，その一つに時間領域がある。

1．2　時間領域の in

まず時間表現の例をいくつか見ることにしたい。

(11) He retired as a player in 1920 to become team manager.

(12) She's studying for a degree in her spare time.

(13) I seemed to remember meeting him before,in the distant past.

(14) A cure for cancer may well be found in the future.

(15) She'll be here in a few minutes.

(16) I saw him for the first time in twenty years.

(17) Come in time for dinner.

以上の例に見られるだけでもinに導かれる時間の範囲は微妙に異なっている。(11) のように特定の数字として明示されているような場合はその時間の範囲が限定されているし，(1) (b) の in the morning でもある程度限定されているが，(12) (13) (14) の her spare time, the distant past, the future となるとその範囲は極めて漠然としている。空間領域の場合はどれ程その境界が漠然としていてもその存在を人間の感覚器官を通して知覚することができる。しかし時間の場合は，たとえ「午前中」という時間の範囲を太陽の位置によって確認できると思っているとしてもそれで時間そのものを見ているわけではないし，カレンダーの数字がそのまま時間の実体であるわけではない。このような概念が空間領域の in でとらえられているのは「容器のイメージ・スキーマ」が時間領域に写像されてとらえられている，つまり境界があり in–out の方向性をもつ容器のメタファーを通して理解されていることを示している。さらに容器の中の空間の広がりに対応して，ここで表されているのは瞬時的時間ではなくむしろある程度継続した時間の範囲であって，past, future ということになると範囲は無限であるが，やはり境界をもつものとしてとらえられている。(15) (16) ではある範囲の時間の経過の後ということを表しているのであるが，数量的に把握された時間がやはり容器として扱われている。(17) は time そのものを complement とし熟語的に用いられるが，逆の out of time, time out もあり，対応する in place, out of place も，物理的な場所そのものではなくて抽象的である。

1．3　on と at

前置詞 on，at についても空間における位置関係が時間領域に写像されていることは(2)(a)(b)，(3)(a)(b)で明らかである。

空間における on は「ものの表面に接触，付着している」位置関係を示し，普通，より小さいものとより大きいものとの接触している状態である。この意味で反対の位置関係を示すのは off である。(2)(a)は二次元の面を領域とする例であるが，次の(18)の road は線的領域としてとらえられている。

(18) Our cottage is on that road. (Quirk, R. et al, 674)

このような on の空間における位置関係の時間領域への転用の特徴の一つは，時間の範囲を特定の「日」に限定している点である。特定の月や年が in August, in 1995 のように in を伴うのに対し，特定の日は on Monday, on May the first, on New Year's Day である。また，まる一日より短い時間の場合でも特定の日の一部であることが示され，on Monday morning, on Saturday afternoon, on the following evening となるのに対し，in the late afternoon のように in が用いられる場合はこのフレーズの中では特定の日の限定がなく，より漠然としている。このような例から，in はその空間領域内で，その位置が固定されないことから，より長い期間の時間（period of time），またはより漠然とした時間帯を表すのに用いられるのに対して，on の場合は接触，付着という空間における位置の固定化の特質がメタファーとして時間に転用されると，より限定された時間帯，より固定された時間帯を表すのに用いられると考えることができる。また，on seeing him のような complement として動名詞をとると「—するとすぐに」の意味となるのは，時間的接触，近接の意味をになうことによるものと思われる。また on time が「きめられた時間に」の意味に用いられるのも納得のいくことであり，逆の off time も空間の位置関係に対応している。

空間における at は点の位置を示すものである。点は厳密には面積がないはずであるが，(3)(a)のように bus stop に用いられているのは，実際の面積に関係なく bus stop を一つの点ととらえているからである。普通 London のような大都市は地域として扱われる時は in を伴うが(19)，地球上の一点と見れば at となり(20)，視点の置き方が用いられる前置詞に反映される。

(19) He works in London, but lives in the country.

(20) Our plane refuelled at London on its way from New York to Moscow. (Quirk,R. et al, 676)

従って，時間領域に写像されたatの表す時間は(3)(b)の at 2: 30 ように特定の一時点であり，また at breakfast time, at night のような場合は一時間帯が一時点としてとらえられているこ

とを示している。

このような空間的用法と時間的用法の対応は in, on, at のみならず, by, over, through, from–to など他の前置詞についても広範囲にわたって見られる現象であり, 物理的空間の位置関係のスキーマが時間領域に写像されている様子が理解される。時間表現における前置詞は空間のスキーマによって動機づけられて (motivated) いるのである。

2.「前」「後」の方向性と時間

時間が空間に存在する「もの」であるという認識はごく一般的であり,「時間が十分ある」や「時間があまりない」などの表現はその認識を示すものであるが, There is still time for you to change your mind や We don't have much time などにも表れており, 数量化されて多くの日常的な表現として用いられている。さらに単に「もの」としてだけではなく,「動くもの」としての認識が Time flies や Time passes などに表れている。「もの」の動きには上下運動, 左右の動き, 螺旋状の動きなどさまざまな動きがあると思われるが, 中でも空間において「もの」が前後に移動する現象が時間領域には写像されていることが, 多くの例から見てとることができるのであるが, まず前後の方向ということについて確認する必要がある。

前後の方向性は人間が本質的に, 目が置かれている顔を前面とし, その反対側を後面として, 前面が向いている方向へ移動する, という生理的な事実に基づいている。勿論, 事情によっては後退りすることも, 左右に移動することもあるが, 基本的には前方移動である。人間のように絶対的に前後が定まっていない場合には, 例えば電車を思い浮かべてみると, 進行する方向に向いている面が前であると見なされ, 終点から引き返す時はその逆の面が前とみなされ前後が逆転する。従って, どちらにしても前後は進行方向と密接に関係しているわけである。

この空間における前後の方向性 (front-back orientation) は, 時間領域においては, 過去, 現在, 未来とのかかわりあいが生じてくると考えられる。さらに前後の方向性は二つの面からとらえられ, 一方は時間概念を構成する主体である人間と時間との方向的関係であり, 他方は時間相互の関係である。この問題については, Lakoff, G. & Johnson, M. (1980)[(3)], さらにはこれを踏まえて山梨 (1995)[(4)]が考察しているので, まずその論旨を整理しつつ検討を進めていくことにしたい。

2. 1　人間と時間の方向的関係

人間と時間の方向関係としては二通りの見方があり, 一つは時間は動いているもので, それに対して人間は現時点に留まっているという見方であり, 他方は時間は静止していて人間

が移動するという見方である。

まず前者の観点に立つと，時間はその前面を人間の前面に向けて移動し，人間が存在している時点に近づき，通過し，そのまま人間の後面に背を向けて遠ざかって行く。とすれば，人間が存在するその時点が現在であり，前方にあって人間の方に近づいてくるのが未来で，人間の後方向に遠ざかるのは過去である。Lakoff, G.&Johnson, M. (1980)[5]では未来がわれわれの前方にあることを次のような例によって示している。

(21) In the weeks ahead of us...

(22) The time will come when...

(23) I look forward to the arrival of Christmas.

(24) Before us is a great opportunity,and we don't want it to pass us by.

(25) I can't face the future.

未来が前方にあってわれわれの方向へ向かって進んでくることがahead, come, look forward to, arrival, before, face によって表されている。特に ahead, come の例は実際に多くみられるので下に追加しておくことにするが，ここで付記しなければならないことは，人間が未来を前にしているのは出来事の時点であって話し手の現在とは区別され，従って過去時制による文にも当然表れるということである。

(26) He had his breakfast and thought about the day ahead.

(27) In years to come people will look back on today as a turning point in the history of the world.

過去は人間の後方向にあり，その方向に遠ざかることは次の例に示されている。

(28) That's all behind us now.

(29) The time has long since gone when...

人間の存在する時点に到着した時間はそのまま通り過ぎて過去の領域に入っていくことになるが，そのことが behind, go によって示されている。また go は by を伴うことも多く，「—のそばを」の意味が加えられ，go (by) と同様に pass (by), fly (by), speed (by) も遠ざかる動きである。

(30) When you get older, the time seems to go by more quickly.

(31) New Year's Day passed by almost unnoticed in the South of England.

(32) "Hasn't the afternoon passed quickly," said Carol."Yes,time flies when you're having fun."

(33) The days leading up to the wedding sped by and before I knew it the big day had arrived.

次に，時間は静止した通路であって人間がそこを移動するという場合が考えられる。人間は過去に背を向けて未来に向かって進んで行くのであり，その移動は go に代表される。

(34) As we go through the year...

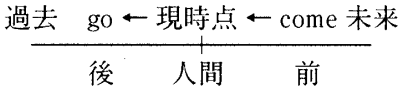
(35) As we go further into 1980s...

時間の道を行く人間は進行方向に進むことができるだけで，後戻りはできないし(36)，過去からある時点への到着は come によって表される(37)。

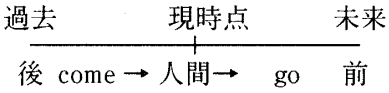
(36) I wish I could go back to my school days.

(37) She came to the age of marriage.

ここで come と go の方向関係について整理する必要がある。この二語は本来空間における移動を表し，お互いに反対方向への移動を示す反意語であるとされるが，どちらが用いられるかは，同一のものの同方向への移動であっても視点の置き方によってきまってくる。今，X と Y が向き合っていて，Y が X へ向かって移動するとすると，X の視点にたてば Y が come であるのに対し，Y の視点にたてば Y が go である。人間と時間が向き合っていて，時間が移動し人間が静止している時，未来時間が人間の方向へ come するが，到達した時間は過去時間となって離れて行くわけで go となる（図１）。但し，一般的な移動の場合は Y が X へ向い，同じ方向を逆に Y が元の位置に向かってもどることも可能であるが，時間の場合は不可逆であって，到着点を離れる時は来た方向と必ず逆方向へ向かう。時間が静止していて人間が移動する場合は，過去時間から人間が現時点へ come し，未来時間へ向かって go する（図２）。図１と図２が矛盾しないことは，人間が前方へ移動（go）すれば前方に位置するものがこちらに近づいて来る（come）ように意識される経験から明らかである。



（図１）



（図２）

２．２　時間相互の方向的関係

時間が「移動するもの」であれば，先を行く時間とその後に続く時間とがある。時間相互の前後関係が問題になることになる。この点について preceding，following と before，after を伴う表現を取り上げて考察することにする。

２．２．１　Preceding と following

動詞 precede と follow は本来空間における前後の方向関係と移動の意味を含んでいる。ある存在物 X が他の存在物 Y の前方に位置し，その前後関係を保って共に同方向に移動する時，X は Y にprecedeし，Y は X に follow する。この関係が時間に写像されると，先行する時間と後行する時間との関係となり，人間との方向関係は視野に入らないことになる。この点に

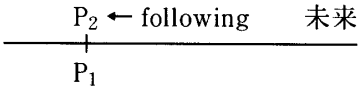
ついて，Lakoff, G.& Johnson, M.（1980）では，

(38) In the following weeks...

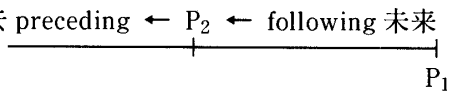
(39) In the preceding weeks...

(40) We're looking ahead to the following weeks.

の例をあげ，(38)の following は後方にあって未来を，(39)のprecedingは前方にあって過去を表しているが，前節（2．1）の未来は前方，過去は後方の方向性と矛盾するものではないことを説明している。つまり，時間相互の関係と，人間と時間との関係という視点の置き方の違いによるものであり，両者が共存することは可能であり，従って（40）が可能となるというのである。ただここで注意を要することは時間相互の関係と過去，未来の時制とがこのようにいつも単純に結びつけられるかということである。過去，未来は現在との関係でとらえられる概念であるが，現在の時点というのは，話し手の立つ時点（p_1）と出来事の時点（p_2）とに分けて考える必要があり，時間相互の関係は出来事の時点（p_2）との関係でとらえられる。従って（40）では（p_1）（p_2）が一致しているために following が現時点に後行するという意味で未来に対応している（図3）。



（図３）



（図４）

しかし（p_1）（p_2）がずれている場合には，following は（p_1）の視点からは過去の時点にあたるのであるが，（p_2）の視点にたてば未来である（図4）。

(41) The following day she woke up with a terrible headache.

(42) The company's profits rose sharply during the following year.

前方を行く preceding の場合は過去のある時点（p_2）からみてさらに先行する時点をさし，話し手の現在（p_1）からは大過去になることは，直接話法の last week が間接話法で the following week に言い換えられることからも明らかである。

(43) Ann explained that the exhibition finished/had finished the preceding week. (← Ann said,"The exhibition finished last week.")

(44) The company made more profit in that one month than it made in the whole of the preceding year.

以上のように，preceding，following は時間相互の前後関係を表し，視点の置かれる時点との関係で相対的にそれに先行するのは過去，後行するのが未来と解釈されるのである。

2．2．2　before と after

空間的前後関係が時間的前後関係に転用される例としてさらに before と after があげられ

る。空間における前後関係として，順序が注目される場合と前後の特定の位置そのものが注目される場合とがあるが，両者とも順序に視点が置かれているといって差し支えないように思われる。

まず before の場合は前方の特定の位置そのものをさす場合もあるが，普通は(45)(46)のように in front of が用いられるようである。また後方の位置そのものを指す場合は(47)(48)のように behind，in back of などが用いられ，after が使われることはない。

(45) She parked the car in front of the office.

(46) The bartender put the drink in front of me.

(47) Put a cushion behind you. You'll feel more comfortable.

(48) Cook heard a loud explosion from a building in back of him.

従って，before，after 共に(49)-(52)のように相対的な順序を表わすのが主な用法であるということができる。

(49) Aren't you before those people in the queue?

(50) Harajuku station is one stop before Shibuya station on the Yamanote Line.

(51) I always get off the bus at the stop after the hospital.

(52) You go first, then Chris, then I'm after Chris.

時間領域に before，after が転用される時，この空間における前後の相対的な関係のスキーマが写像され，二つの時点の間の相対的前後関係を示し，従って過去，未来と直接結び付くものではないことは preceding，following の場合と同様である。

(53) Last week she was in paris, and the week before she was in Rome.

(54) The ceremony will take place before the meeting.

(55) The meeting will take place after the ceremony.

(56) Helen arrived on July 20th and I arrived the week after.

以上の例にみられるように，話し手の現在とはかかわりなく，before，after 共に，過去のある時点に視点が置かれれば過去を，未来のある時点に視点が置かれれば未来を指すことになるが，the day before yesterday ,the day after tomorrow のように，話し手の現在を基にした yesterday，tomorrow との前後関係ということになると，当然前者は過去を，後者は未来を指すことになる。

以上，空間における位置関係を示す前置詞 in，on，at と，空間における前後の方向性を含む preceding，following 並びに before，after が時間領域ではどのように用いられているかを検討してきた。それぞれの空間における認知のスキーマが，メタファーのはたらきを通し

て時間領域に写像されている様子から，時間領域におけるそれぞれの役割は決して任意的なものではなく，空間領域における認知スキーマによって動機づけられているということができるのである。

注

(1) 例文は特記しないかぎり，*Longman Language Activator* (1993), *Collins Cobuild Essential English Dictionary* (1988), *Shougakukan Random House English-Japanese Dictionary* (1973), *Longman Dictionary of Contemporary English* (1989) による。

(2) Quirk, R.et al (1985), 673-674.

(3) Lakoff, G. &Johnson, M. (1980), 41-44.

(4) 山梨正明 (1995), 49-51,114-117.

(5) 例文(21)-(25), (28)-(29), (34)-(35), (38)-(40)は Lakoff, G. &Johnson, M. (1980)による。

参考文献

Lakoff, G & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By.* The University of Chicago Press.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things.* The University of Chicago Press.

Quirk, R. et al (1985). *A Comprehensive Grammer of the English Language.* Longman.

Sweetser, E. E. (1990). *From Etymology to Pragmatics.* Cambridge University Press.

山梨正明 (1995)『認知文法論』ひつじ書房